

「共に支え合って生きる」基本に立ち返り 市民社会の課題を考える

公益財団法人かながわ生き生き市民基金理事長

横浜 YMCA 顧問 吉村 恭二

19世紀ヨーロッパの「自主と自由」を求める運動

実は172年前の今日、1844年12月21日は、世界の協同組合の源流といえるイギリスのロッヂデール公正先駆者組合の誕生日です。これは大変奇遇ですけれども、今日のはじめにロッヂデールが生まれた社会背景からお話したいと思います。当時のイギリスは大英帝国と呼ばれ、世界で最も影響力のある国でした。そして技術革新、製造業の成長、蒸気機関の開発等による産業革命が始まり、経済最優先主義がイギリス全土を覆っていました。大量生産が可能になり、大量消費が行われるようになった一方で、農村から集まった若い青年たちをはじめとした失業者の群れがあふれるようになりまし。そうした中で28人の心ある人たちが1ポンドずつ出し合って、ロッヂデールという所で協同組合をつくったというのが、生活協同組合の始まりと言われてい。またセツルメント運動というのが当時より20年前に始まっています。教会改革と注目されたものです。教会が国教会から分離独立したわけですが、信者たちが教会を自分たちでつくりたいというとき、政府の補助がありませんから自ら自腹を切りました。英国教会から離れて新しい教会を造った際にも信者の人たちが自ら募金し、お金をためて自分たちの教会をつくっていった歴史があります。普通のプロテスタントの教会は、礼拝が終わるたびに献金をします。献金はオフアリングといいます。自らが提供するという意味です。必ず納めなくてはならないわけではなく、お金がないときには、そのまま献金袋を次の人へ渡せるわけです。いわゆる自主的な献金を意味するフリーオフアリングです。教会改革のもう一つの特徴は、例えばロンドンに28教区に分けて、年寄りが多い教区は少し朝早く礼拝を始めよう、こっちは働く若い人たちが割に多いから遅くやろうといったように工夫して、個人や教会の在り方を大切にしてきました。近年、企業などで大切にしている事業の受け手を特化して考える手法として、マーケティングがあります。NPOの事業でもよく考えなければいけないことですが、マーケットというのは市場だけではなく、そこに住んでいる人たちのニーズ、あるいはいろいろな文化などに合わせた事業の在り方や対象をきっちり絞っていくという考え方です。この考え方を最初に導入したのは先ほどのイギリスのパ

リッシュという、教区を分けていった手法でした。

私が長くかかわっていたYMCA（キリスト教青年会 Young Men's Christian Association）も1844年にロンドンの片隅で誕生しています。寝る時間がないくらい過酷な労働環境の中で、田舎から出てきた若者たちが商店等で働いていました。お金さえあれば、歓楽街に繰り出して憂さを晴らすというような退廃的な生活を見て、このままじゃいけないと若者12人が一生懸命祈りあい、語り合って、YMCAをつくっていったという歴史もあります。

このように当時、誰かから強制されるのではなく、自分の気持ちを大切にしていこうとする自発的な運動が多く生まれました。こうした運動をボランティアといいます。今で言うボランティアムーブメントの出発点だろうと理解しています。

日本社会における子ども、若者、高齢者を覆う貧困

イギリスの社会学者リチャード・ティトマス（1907年-1973年）は、ゆりかごから墓場までという福祉政策が行き詰った中で、「新しい貧困」を提唱しました。それは例えば、感情と情緒の貧困、言語とコミュニケーションの貧困、傾聴と学習の貧困などを挙げています。これらは言い換えれば、経済的に貧しい人だけではなく、社会全体の中に、仮に所得が高い人でも実は大変大きな貧困状況の中にあるということです。身近にある地域コミュニティの問題を厚労省の「国民生活基礎調査」にみると、会話の頻度が少なくなっているというデータがあります。高齢者も含め、お互いの気持ちを通わせていくということが非常に少なくなっているようです。リチャード先生はこれを「コミュニケーションの貧困」と言っています。

つい先日新聞の片隅に生活保護世帯が過去最多の163万6,902世帯になったと書かれていました。経済的な貧困は大きな問題ですが、「新しい貧困」という視点をもって、経済的な貧困から派生する連鎖反応がたくさんあることも一緒に考えておかなければいけないだろうと思っています。

OECD（経済協力開発機構）の2015年一人当たり名目GDPが34か国中20位の日本が、世界の中で少なくとも豊かな国であると思っているところですが、子どもの貧困率はワーストから4番目です。これは言い

換えれば貧富の格差が激しいということです。6人に1人は本当に貧しい状況ですが、一方では豊かに学校に行き、部活もやり、楽しく塾にも通っています。僕の知っている近くの子どもなんかは毎日塾に行っています。ここで申し上げたいのは、「新しい貧困」の発生という中にどっぷり私どもが漬かっているという状況を自覚しなければいけないだろうということです。生活の余裕は多少あるかもしれませんが、実は精神的な意味でゆとりがない、あるいは他者との話し合いがないという状況にあるのではないのでしょうか。

レストランなどで食事を注文し運んでくれるウェイターもしくはウイトレスに対して労働の対価としてお金を払っているのだから、その労働を受けて当然だという考えがあります。でもそのサービスに対して「ありがとう」って感謝をする、そうした気持ちを持ち、言葉に出すことはとても大切なことと思います。しかしながら現実はそのでなく殆どの人は黙って料理を受け取ってしまうことのほうが大半です。日本の場合は特に、自分の親しい人々、あるいは内側ではお互いに親しい関係も持ちますが、そうでない外に対しては意外に冷たいものです。私たちには内側と外側とのバリアがあるんですね。ウチとソトをきちっと区別するようなどころがあるようです。

1979年に日本で70万部を超えるベストセラーとなった『ジャパン アズ ナンバーワン』という本があります。今もたくさん売れているそうです。経団連の人たちは当時、日本もついに世界で冠たる企業社会を築くことになったと言って、大きな顔をして喜んでいました。しかし本を読み進めていくと、日本がナンバーワンになるには理由があると書いてあります。それは、個人の権利とか個性とか創造性が圧迫されているとの指摘です。日本社会の伝統でもある「ソトには親切、ウチである日本人には冷たい」ことが書かれています。著者は村八分という日本語をそのまま使っています。長い物には巻かれて生きていくという社会、異端は退けられ、排除される。だから、ナンバーワンになり得るんだと。異端者をはじき、みんな同じような同土集団、会社人間をつかって、一丸となって頑張ろうという会社社会をつくったと彼は言っています。私も同感です。

2020年の東京オリンピックに向けて「オ・モ・テ・ナ・シ」なんて言ってますね。誰も反対はしないんですが、ことさら外国の人におもてなしをして、普段自分の近くで接している人や日本人におもてなしをしないのか。言い換えれば、親切に接していこうとしないのか。僕なんかへそ曲がりですからそう思います。

今、私たちは地域社会の中でごく普通の近所の付き合いの中にあっても、ウチとソトとが区別され、本当に心が休まるような交わりはそうたくさんないという気がいたします。そう考えると、私はあらためて皆さんがたが、コミュニティーカフェ、あるいは居場所など、

集う人たちが心の安らぐ場をつくり出し、いこうとお考えになっていることが、いまの日本社会でどんなに大きな意味があるのかということを考えます。現代社会に生きる人びとは心の一番深いところで、巨大な社会機構や組織の中に身をお置きながらも、等身大の交わりをつくっていきたいという願いを持っているのです。本来のコミュニケーションは、人間の交わりの中で、人間のぬくもりが感じられる中で、あらためてできくことだと思えます。今、私も含めてですが、ITの発達のおかげで、どんどんコミュニケーションが発達したかに見えますが、ヒューマンコミュニケーションという「人間のぬくもり」のあるコミュニケーションは、逆に減退しているのではないのでしょうか。そう考えてみると、私たちは今日の市民社会の中で何が欠けているのだろう、あるいは何をつくり出さなくてはならないだろうと、思いを巡らさなくてはなりません。

市民活動への期待とその視点

——ボランティア思想と、共に生きることを願う

人びとの群れとしてのアソシエーションの拡大——

YMCAは、Young Men's Christian Associationの略称で、1844年に誕生したとき以来、アソシエーションといっています。それは先ほど申しましたように、使命共同体ということですね。一人ひとりでは何もできないけれども、同じような使命感を持った人たちが集まれば、何か自分たちの運動が起こせるんだという考え方です。しかも、ボランティアという言い方は、自ら参加をするという意味です。つまり、自発的に参加して、新しい共同体をつくっていくことになります。あえて“新しい”というのは、ただ共同体と言うと、企業共同体とかありますが、そうしたことを考えがちになります。そうではなくて新しい共同体というのは、使命共同体だと私は考えています。

ボランティアという思想をイギリスの英国教会改革、あるいはロッチデールの先輩の人たちが自ら率先して行動を起こしたように、いま皆さん方は協同組合運動をされています。その当事者はボランティアという思想を基に共に生きる人たち、同じ願いを持つ人たちであると思います。そういう人たちの群れを私はアソシエーションといっています。今日では、1844年の頃のアソシエーションよりも、何十倍、何百倍もその必要性が増してきていると考えています。強大な行政組織や企業がたくさんあります。トヨタグループの全従業員は33万9,000人だそうです。日立製作所も同じぐらい。すごいスケールです。もちろん、それが悪いわけではないと思います。一方そういう大きな企業のスケールに比べれば、私たち非営利組織は小さなものです。ですけれども、そういう小さな群れがたくさん私たちの社会にできていくことが、それこそ人間の顔をした、人間のぬくもりのあるグループがたくさんでき

ていくことではないでしょうか。そういう意味で、私はこれからの時代こそ、アソシエーションというのが重要になってくるのではないかと考えています。異なった人々が共に一緒にの使命感を味わえる、使命共同体というのがとても必要ではないかと思うのです。

新しい公共の担い手として一人間性の回復を求めて—

生活クラブ生協と福祉クラブ生協が長年支援して若者の滑動を顕彰してきたキララ賞の今年を受賞者に、28歳の加藤くんという若者がいます。彼は横浜市西区の築65年の古民家にラ・カサ・デ・ココという名前を付けて、異なる年齢の人々や多国籍交流の場をつくりたいと一生懸命頑張っています。そこに建築家の若いプランナー達加わってきて、そこを何とかうまくつくっていこうと一緒にやっている。彼らにインタビューしてみると、彼らは本当に、「やあ、こんにちは」と言えるような交わりができるように、そういう場を何とかしてつくりたいと考えています。空き家活用というのはひとつの例ですけども、私は、ぜひ皆さんにそういうものをたくさんこの社会の中につくっていく方法を考えてみて欲しいと思います。

私がYMCAの活動を通して出会いご指導いただいた方で、国際基督教大学(ICU)の初代総長をやっていた湯浅八郎先生という方がおります。湯浅先生は、日本の社会の中でhomeという英語を“家庭”と訳したことは問題だと、いつも怒っていました。なんでhomeを家と庭のことと言うんだと。先生は8年ほどアメリカで生活しながら、homeという言葉がずっと考えておられますが、homeというのは「気持ちがほっとする所」「くつろげる所」だと訳されました。家と庭があればいいの、大きな家を建てればほっとするのか。マイホーム主義とかいっているけれど、問題じゃないかと。homeというのは、アットホームと英語で言うように、本当にくつろげる所、ほっとする所、それが家庭になければいけないということです。そう考えると、あらためてhomeというのは、家庭であると同時にほっとする所として、居場所というような言い方もしますね。そこに自分が存在する、居るというだけのことではないんです。そこで気持ちが解放されたり、いろんな意味でほっとする所というように考えるべきではないかと思えます。

私はNPOというのは、勿論Non Profit Organizationと言う言葉の略であることは承知していますが、ある意味ではnew public organizationとも考えられるのではではないか、と考えています。日本では公共と言う概念は、政府や地方自治体などが行う事業や施設などを意味すると思ってきました。しかし新しい時代は、私たちが仲間と共に新しい社会づくりを目指して活動を展開するアソシエーションである「使命共同体」が、「新しい公共」を担っているのだという自負心と自覚を

持つべきではないかと、常々思っています。そういう意味で、ぜひ新しい公共の担い手として皆さんが新しい起業をしていただければうれしいと思います。

私は生活協同組合の生活という言葉が好きです。英語のライフというのは生活であると同時に命ですね。命の他にも人生とか生涯とか、そういう意味をみんな込めています。だから多面的に命をいろんな形で物語っている一つの言葉です。そうしたライフを支えるのがNPOだと思っています。人間は多様な生物とか地球環境、あるいは一人ひとりの生きがいなど関わって生きています。NPOは社会で大切にされなければならない価値であることを、一人ひとりがよく知って、そうしたテーマを実践していく団体なんです。だから、例えば介護や育児のような大切なことは、人の手のぬくもりがそこにある。命に対する畏敬の念もあるし、命に対する思い入れもある。命を大切にしていこうからこそ、手のぬくもりだとか、人間の顔の見える関係が必要なんです。

NPOでもう一つ大切なことは、実は多様な命が働く場所でもあるということです。自分たちだけでやるのではなくて、できるだけ多くの人を巻き込む。例えば働き手として今まで認めてこられなかった障害を持っている方と一緒に働いて欲しいと思います。一つの小さな事例ですが、私の関係するYMCAではそういう方々と一緒にパンを作って、それを明治学院大学等で売ってもらっています。多様な働き方を提供する場所としてぜひ考えてみてください。NPOというのは、豊かな活動の場となるためには、いろんな働き手がそこに組み合わさっていくということが必要ではないかと思えます。いま世の中は今日のフォーラムのテーマにもありますように、本当に分断社会、あるいは所得の格差が進んでいると思います。そういう状況だからこそ、むしろ命を支え育むNPOが出番だと強く思っています。

NPOは、たまたま善意であれこれやればいっていいものではなくて、もっと必要な経営の仕方があるかもしれません。今日の巨大化した、そして人間性が奪われている社会は、産業革命の時代状況どころではないですね。非常に経済格差が広がり、隠れている貧困がある中で、私たちもあらためて必要な働きを考えたいと思います。

(よしむら きょうじ)

